

題名： 令和2年産水稻の作柄について

(スライド1)

これから令和2年産水稻の作柄について、埼玉県農業技術研究センター農業革新支援担当の村田より情報提供をします。

(スライド2)

最初は令和2年度の気象経過について、日平均気温と、日降水量の推移を中心に説明します。5月から10月までの、熊谷地方気象台の、日平均気温の推移をグラフ化したものです。6月上旬の梅雨入りころまでは、5月下旬の一時的な低温を除き、日平均気温は、ほぼ平年よりも高く推移しました。梅雨入り後は、7月上旬までは、ほぼ平年並みに推移しましたが7月中旬から梅雨明けの8月初旬までは、「やや肌寒い」低温気味の日平均気温が続きました。8月初旬に梅雨明けを迎えましたが、日平均気温は、それ以降は平年よりも高温に経過し、特に9月上旬までは、かなり高く推移しました。

(スライド3)

6月から9月までの日降水量の推移です。平年ならば、梅雨期間でも降雨は断続的で、数日は晴天日がありますが、本年度は梅雨入り以降、梅雨明けまで、毎日のように降雨がありました。また、8月下旬以降も、梅雨時期ほどではないものの、定期的に降雨が続きました。

(スライド4)

このような気象条件を反映して、7月28日には埼玉県病害虫防除所から「いもち病」に関する、病害虫発生予察注意報が発表されました。「葉いもち」「穂いもち」が県内一円で広く認められ、収量に影響を及ぼしたものとされます。

(スライド5)

では、作期ごとに日平均気温と、1日当たりの日照時間のグラフを使って振り返っていきます。4月下旬から5月初旬にかけて、移植をして9月初旬ころまでに収穫する早期栽培では移植時期は気温も高く、日照時間も多かったことから、活着・初期生育とも良好でした。穂が出始めた出穂始は、それまでの高めの気温を反映し平年よりも早まっていたのですが、ちょうど、7月中旬が低温気味に推移した時期になったため、有効茎の4~5割が出穂する「出穂期」まで、やや時間がかかり、遅れ気味となりました。玉井試験場の5月1日植え「コシヒカリ」の水稻生育相では、出穂始は早く出穂期は平年並みとなりました。

早期栽培の中でも4月下旬に移植したものは、登熟期間の前半が平年よりも低めに推移し、高温障害米発生の目安である、出穂後20日間の日平均気温が「27℃ライン」よりも低い状態の水稻が多かったと思われます。出穂後20日間の日平均気温を、グラフに示すと「緑色の折れ線」となり7月25日ころまでに、出穂していれば、27℃より低かったことを意味します。登熟後半は、気温も高く、日照時間も多くなり収量、品質とも良好でした。

(スライド6)

5月連休明けから5月末までに移植する早植栽培では、移植時期は、低温に遭遇する時もありましたが、概ね初期生育は順調に経過しました。その後は、やや過繁茂気味の生育でしたが7月に入ると低温、日照不足の天候が続き、過繁茂凋落型の生育となり有効茎数はやや少なく、軟弱徒長気味の生育を示しました。加えて、降雨により中干しが徹底できず一部で倒伏が認められました。また、いもち病の発生が多く認められました。出穂期は平年並みでしたが、登熟時期の8月に、日平均気温が「27℃ライン」を超える高温が続き、また、緑色のグラフが示すとおり、この作型で予想される、7月下旬ころから8月上旬ころの、出穂期間、全てにおいて、出穂後20日間の日平均気温は、27℃以上のため、高温障害米等の発生により品質は低下しました。成熟期は平年より早まりましたが、収量は、多日照などにより、平年並～やや多い傾向になりました。

(スライド7)

6月に移植する普通期栽培では、田植作業は概ね平年並みに進みました。その後の低温、日照不足で、分けつが抑制され、茎数がやや少ないものもありました。また、中干しが徹底できず一部で倒伏も認められました。早植栽培と同様、いもち病の発生が多く認められました。この作型も緑色のグラフのとおり、8月27日ころまでの間に、出穂期を迎えた場合は出穂後20日間の日平均気温は「27℃ライン」を超えており、高温障害米などによる品質低下が多く認められました。また、高温の影響により成熟期は早まりました。

(スライド8)

麦あとの6月中旬以降に移植する、麦あと栽培では、出穂期までの生育は、普通期栽培と同様に茎数不足の傾向となりました。出穂期は8月下旬のため、出穂期が遅くなるにつれ、気温も27℃を下回り、ほぼ平年並みに推移したことから、高温障害米の発生も少なくなり、品質は徐々に改善されました。収量は茎数不足などにより平年よりも低い傾向となりました。

(スライド9)

農林水産省が令和2年12月9日に公表した、水陸稲の収穫量と作況指数です。県東部地域の作況指数は「102」、県西部地域が「101」、埼玉県全体では「102」、収穫量は10アール当たり496kgとなりました。

(スライド10)

これは、令和2年10月31日までの農作物検査結果速報値のうち、水稻うるち米、玄米の結果と、農水省の米穀の農産物検査結果の平成29年から令和元年までの3年間の平均値です。本年は1等比率が48.3%で、過去3年の平均は74.7%、2等比率が本年は34.7%、過去3年の平均は約18.8%となり、全般的に品質は低下しました。品質低下の原因は、高温障害米の発生や、収穫時期の降雨による、作業遅延などによる胴割米の発生などでした。

(スライド11)

同一の調査結果のうち主要3品種の検査結果です。3品種を比べると、「彩のきずな」の1等比率は、74.2%で一番高く、「コシヒカリ」は、46.7%、「彩のかがやき」が、19.6%となりました。品種特性として、高温耐性のある順に品質は高くなる傾向にありました。

以上で令和 2 年産水稻の作柄の説明を終了します。最後までご視聴いただき、ありがとうございました。